

わたしの人生を変えた人たちと
の思い出に

koberyo1

わたしが今日、こうして生きていられるのは、多くの人の指導（みちびき）や、あたたかな友情のお蔭だと思っている。

思い出される多くの人の中で、まず筆頭に上げたいのはH氏のことである。

わたしは当時、十八歳にして海軍の飛長（とびちょう）、すなわち兵長であった。対して召集令状をもらって兵隊になったH氏は、わたしの部下である。予科練をへて兵隊になったので、すでにわたしは年長者であった彼よりも階級が上であった。おそらくH氏はその頃、四十歳前後であったろうと推察される。

部下ではあったが、わたしは威張ったり、私用を押しつけるようなことはしなかった。H氏もまた、弟のように十八歳の若輩者を「ふところ」に入れてくださり、まさに人生の指南役として色々なことを教えてくださった。

お酒の飲み方はもとより、喫煙の所作や礼儀作法、時にはどこでどう手に入れたのかわからなかったが、饅頭まで惜しげもなくくれた。手紙の書き方もそう。書き出しは「拝啓」から始まり、「草々」、「敬具」で締めくくるとか、そういった細々なことを教えてくださった。小さなことではある。しかし実際に、社会生活を送る上で、けっしてないがしろにできない種々雑多な大切なことどもを教えてくださったのである。

わたしたちはチームで仕事をしていたのだが、ほかの部署からきたばかりの荷物、たとえば一木箱の梱包を解くときなど、ボールを使ってこじ開けるのだが、なかに入っている機械に傷をつけないよう開けるコツなど、実践的なことばかりだった。

ほかにも率先して作業をしたり、人間として見習うことは多かった。飯を食べる際は必ず声をかけてくださり、食事を共にしてくれたのは、ほんとうに心あたたまる思い出だ。大学出のインテリであり、人間の幅もひろく度量もあり、滋味豊かな「おとな」の方であった。

その後、終戦となった。わたしたちのいた海軍の部隊は解体された。H氏は奥さんのいる東京へと向かい、わたしはといえば母のいる青森は弘前をめざすことになる。

別れ際、H氏はこう言ってくれた。

「東京にくることになったら我が家を訪ねるように」、……と。

そのような言葉を親切にも無能な上官であり、まだ二十歳にも満たないわたしにかけてくださった。しかも、――世田谷区に住んでいるから小田急線に乗ってきて、とまで言ってくれ、住所を記入したメモまで添えて。

こうしてわたしたちは別れ別れとなった。この時は後日の再会など、思いもよらなかったけれど。

ともあれ、終戦直後は極度に食糧事情が悪かった。「飢えること」を恐れ、わたしは食料がふんだんにある母の実家に急いだのだ。

東京は焼け野原が依然、燻った状態で、日々の食べ物に事欠くだろうことは容易に想像できた。そういうところにHさんは向かうのだ、と思いながらわたしは北へひた走る列車に乗っていた。

※

戦争が終わって、まだ間のないころである。お茶の水の駅を出て、駿河台の坂を下りるところで声をかけてくる人がいた。早稲田実業時代、一つ机でともに勉学に励んだ友、――K君であった。K君との友情もまた、忘れがたい思い出の一つである。

K君は中央大学の経済で在学中だった。わたしもまた中央の経済の学生だった。早稲田実業を飛びだし、――のちに卒業資格は手にしたけれど、予科練、海軍にいたわたしとは三年ぶりの再会だ。そして、ふたりがともに中央大学の学生であることは、それこそお互い知らなかったのだ。これこそまさに「奇遇」であり、私にとっては思いもよらぬ大事件であった。

とはいうものの、兵隊をしていたり、戦後は母の実家で農業を手伝っていたりしたぶん、勉強は遅れに遅れ、彼は先輩になっていた。

当時、私の風体はといえば、靴を買えなかったから下駄をはいており、学生服ではなく田舎丸出しの農夫スタイルであった。本やノートは風呂敷に包んで抱えていた。

親しい友ではあったが、若干恥ずかしい思いもあり、その時は再会を約束して早々に別れた。

再びみえることができたのは、中央大学を卒業してからだ。が、この時もH氏同様、ほんとうに再会をかなえることができるとは思っていなかった。

そして私はいま、人生とはつくづく不思議なものだと感慨に耽っている。その時はまだ、K君の紹介で一生の仕事となる商社を紹介され、そこで働くことになるなど、さらに夢にも思わなかったのだ。